研究

龍渓 矢野文雄先生（最終回）

佐伯史談会
賛助会員　山内武麒

余談とむすび

中根貞彦先生が昭和二十九年の二月から、「佐伯タイムス」紙上に、「長寿翁放談」と題するものを連載された。その中数回にわたって、矢野龍渓先生のことに触れられている。そのうちから幾つかを抜萃してみたい。

「矢野龍渓先生が、維新後の日本に国会開設の急務を唱え、詔勅の起草にも関与したのみか、当時の政界に悩をきかせていた大隈伯の、今で言えばブレーン・トラストの一人でありながら、何故第一議会に出馬せず、爾来政界と縁を絶つに至ったか不思議に思われながら、誰にも其の理由が分らなかった。然るに後年まだ先生在世中に先生の伝記が出たことがある。私はそれを読んでいるうちに、ハタと膝を叩いて「成程なあ」と感嘆の声をあげたものである。

それは先生が国会開設の詔勅発布後政米視察に行かれ、明治十七年か十八年かに帰朝して書かれた論文である。その要旨は、家には各々家風というものがあり、甲の家の家風は乙の家の家風と違い、又丙の家の家風とも違う。だから甲の家で大変よい事でも、それを乙の家や、丙の家に移してやらしてみても、必ずしも旨く行かない。それと同じように、議会制度というものは英国では誠によく運行され、その効果を十二分に挙げているが、一度一衣帯水の英仏海峡を渡ってみると、何延でも旨く行ってない。之は畢竟アングロサクソンとラテン民俗の国民性の相違によって、斯の如き結果を来すに外ならぬ。というような主旨であった。洋行前あれ程国会開設の為に努力された大先生が、実際に向うに行って観察すると、この大事を国民性を見落していたことに気がつかれたのに違いない。

日本人の国民性は仏蘭西人には似ているが、英国人とは大変な相違がある。日本では議会政治は到底うまく行く見込みがないと、逸早く国会に見切をつけ、黙って第一議会にも立候補せず、爾来政界と絶縁したものと私は推測した。やはり先生の驚くべき慧眼によって斯く断定されたものと、益々先生の偉大さに敬服して居る。我国の議会政治六十余年の歴史は、先生の叡智を完全に証明しているではないか。斯る先賢者を先輩に持つことは、郷土の誇といわなくてはなるまい。」

「先生の亡くなられたのは昭和六年で、八十一才だったから、もう二十余年の昔になるし、それに郷里に帰られたことの記憶が私にないから、今の佐伯の老人中にも、先生に親しく面接された方は少いであろう。先生は眉目清秀、容姿端麗、挙措其節を失わずとでも言うか、何時お目に掛っても、常に端坐威儀を正し、ぎろりと目を光らせて、静かに物を言われる所、一見貴公子然たる風貌を備えていられた。だから、先生の前ではこちらもキチンと坐り、少しも膝を崩すことが

出来ず、息詰るほどの窮屈を感じたものだ。偶々食事のお相手をする場合など、先生は少しも音を立てられないから、こちらも音を立てまいと気が気でない。一番困るのは音をさせずにお茶漬を食べることだったことを想い出す。別に咎立をされたり、直されたりするのでもないが、唯もうこちらは一生懸命で恐縮して仕舞った。恐らく私一人の経験ではあるまい。こんな風であったから、御党の人々は上下を挙げて、深く先生を尊敬し、その尊敬は全く絶対的と謂ってよく、謂わば神様扱いであったようである。何時の逆挙の時だか、冗談半分であろうが「おれは矢野派だ」という声をきいたことがある。立候補もされない、政界から引退した矢野先生の一種の潜勢力の然らしむる所と謂えるのではなかろうか。」

この外に龍渓先生の借金と、それに関連して住伯にあった百十銀行が支払停止し大騒動が起った話があるが、それは省略する。

龍渓矢野文雄先生の一生を振りかえって見ると、縦横無尽にその鬼才をふるった先生が、支那公使を最後として政界、官界から姿を消されたことは、まことに意外であり、大樹の蔭に拠らなかったためであると云う人もある。しかし大隈から勅選議員に推挙されたが、先生は断っている。政界引退の素志を貫き通した先生の心境は光風霽月の如くすがすがしいものであった。

元来世界の大平和を招来し、国利民福を図ることが先生の持論であった。このためイギリスの新制度を導入し、日英同盟を結んで国威を伸ばすことを実現しようと、先達者となって一意専心努力して、その実現を見ることができた。道義に基ずいて事に処すれば、人智によって平和主義は行われ、交通往来は容易となり、腕力争いは止んで法律の時代となる。古代でも力争の時代から法律の時代となったことは「経国美談」に示す通りである。闘争を好む腕力者は、平和郷に身をおくことは勝手悪く、何かと事を起して世の乱れをさそう。日本にも古来その例が多い。しかし、世界は必ず大平和時代を迎える。国際連盟もやがて成立し、何延の国にもデモクラシーが盛んになって、侵略主義は滅びてしまう。かくして世界の大勢は平和維新へと向こうのである。

これが龍渓先生の理想であった。この理想をかざして世の人を啓蒙しつづけた先生こそ、真に偉大な先覚者であった。

今一度先生の風貌を伝えてこの筆さおくことにする。明治三十六年の「平民新聞」に五十三才の先生を、

「細面で清しき眼、隆き鼻、肉痩せて背スラリとして ------如何にもスマして------キチンとしている。矢野君は総てが能がかりだ。----人に接して叮嚀で悠優迫らず、実にレフアインド・ゼントルである。」

と描き出している。

（おわり）

（付）

龍渓先生金言集

『天地の理に明らかなるものは、天に先ちて事を行ふも、天はこれに違はず』とは至人の言なり。

道と信ずる事の為に大勇さ奮ひし後、これを顧るほど大愉快の事はあらざるべし。

真理を達観するの人は、その世に容れられずとも、知己を千歳の後に求むるの楽又あるべし。

学校にて教はる事柄は表面の儀式のみなり。而して世事の多くがその裏面なるは慨むべし。

事物の知識を得て後ち、知識を得ぬ前の事を顧るほど恐ろしきものは莫し。

古人が真理と信ぜし道の中にて、今世に真理と認められぬもあり。然れば今世の真理もまた、或は後世に真理と認められぬ者があるかも知れず。

我が誤つて遠く来りしを知る時、直に引返し得る人は真の勇者なり。

人より早く知りても、人より遅く行ひて良き事あり。人より遅れて知りても、人より早く行ひて良き事あり。

正しき競争は悪事にあらず、競争は進歩の母なり。

世の中の多くの噂は誇張に過ぎ居るものあり。

遠く望んで美なる山も、近づきて見れば、美を失ふもの多し。

何人も一度は大き望まざるもの莫し。その体験より不可能を知つて、始めて力量相当の事に止まるが常なり。それが宜しきなり。

研究

佐伯城絵図解説 五

―山名家所蔵絵図―

会員　小野英治

本図は、故山名驥先生所蔵の「明治維新前文久ヨリ慶応年間　佐伯城下地図」と書入れのある図面（縦 96.5cm 横 78cm）の山城部分（原寸大）である。

原図は、いわゆる城下町の大略図といえる性質のものであつて、私達が普通に今日考えているところの地図という概念からは、およそかけはなれたもので、各比率、方位等度外視して、必要とされるもののみを大きく描くといふ手法で、特異な図面となつている。よつて、図をみるというより、図に書込まれた文字を読むということが、本図においては意味があるようである。もちろん、城と城下町の図であるから、山城部分のみをとりあげたのでは面白味は半減するが、そこは紙面の都合上、原寸大という点からこのようなことになつている。

さて、この山城部分図において、先ず注目すべきは、